

## 三卷本色葉字類抄の中の漢字音の清濁

### 一、二について

山 田 俊 雄

本誌の既刊の分に兩三度にわたって、三卷本色葉字類抄に關する小論をなしたが、今回は、最近の諸家の研究報告などを閲読する間に思ひ得た事項一、二に關係ある、色葉字類抄における状況をのべ、あはせて管見を示して、参考の資として提供したい。(本誌本号の刊行予定の期日に合はせる為に、予定外に卒爾に筆を執らなければならなくなつたので、十分に行き届いた論の体裁をなさないのを、予め諒せられんことを。)

#### 一、「麴塵」のよみ方

梁塵秘抄卷第二、雜の三五八番の歌に

むこの冠者のきみ、なにいろのなにすりかこのうたう、

さまほしきまぢんやまふきとめすりに、はなむらこみなか  
しは、や、わうこりとちかへさきまむすび かうけちまへ

たりのほやのかのこゆひ

といふのがある。この歌の中で、「まぢん」といふ語が見えてゐて、この語は、「麴塵」に相当するものであること、諸注において何らの異論が存しない。しかしその場合、諸注の本文は、「まぢん」もしくは「麴塵」となつてゐて、第二音節の「ち」の仮名を、濁音「ぢ」とすることに異論がないと思はれる。のみならず、小西甚一氏は「梁塵秘抄」において、特に、「前田家本三卷本色葉字類抄」を援引して、同書に「キヂン」とある旨を明記して、その証拠をあげられてゐる。小西氏のこの注は、定評のあるものであり、みだりに異をさしはさむ余地なきものであるが、このところの、前田家本三卷本色葉字類抄の引用は、私が、右の書の育徳財団写真複製本で検し得たところとは、明かに異なるものである。前田家本字類抄(以下このやうに略称する)では、「麴塵」といふ文字連結は、少くとも二つの個所にはあらはれる。その一つは、キの部の置字門に

麴塵 衣裳部 キクチン (声点、全くなし)  
とあるのが、それである。

他は、キの部、光彩門に見える

麴塵 キチン 「キ」に上声一点、「チ」に平声一点、

である。「ン」に平声一点の声点を指す)

右の二者から、「前田家本字類抄に『キヂン』とある」といふやうな趣旨をよみとすることは、不可能であらう。少くとも、資料の性質を多少考慮するものにとつては、不可能である。小西氏の援用のしかたの正当性は、仮に、この前田本字類抄の中の、右二個所以外他の記事から帰納せられたものと想定してみても、恐らく証明不可能であらうことが容易に推論できる(以下のべるところを参考せられよ)。即ち、「塵」の字音に「ヂン」を、既成の觀念として固持してゐたために字類抄の声点を信用しないといふことが前提となつてゐるに拘らず、なほ、前田家本字類抄を何らかの信憑の資に供し、ようとした矛盾だといへば、いへるのではないか。

東洋大学王朝文学研究会刊の「王朝文学」第四号は、梁塵秘抄特集として、有益な報告を満載してゐる。この中に「三内入声の表記」と題して福地昭助氏がまとめられた報告も入つてゐるが、そこに、右にあげた「きちん」を、やはり「きちん」と見て、

喉内入声<sup>[k]</sup>の無表記の例

の項に整理、編入してゐる。「ち」の清濁に関しては、何も

弁明がないが、大体従来の諸注と同じ態度か、もしくは小西氏説を経由してゐるか、どちらかであらう。この三内入声の<sup>[-p]</sup><sup>[-k]</sup><sup>[-t]</sup>の、無表記の場合は、福地氏の報告によれば、

一、唇内入声<sup>[-p]</sup>

ざこ (雑魚)

ざこう (雑魚)

二十中ご (劫)

二、喉内入声<sup>[-k]</sup>

きちん (麴塵)

ろかくたう (六角堂)

三、舌内入声<sup>[-t]</sup>

はさうほとけ (八相仏)

に限られ、多くは、それぞれ「ウ」「ク」「チ」の仮名で示されてゐるといふ。これによると、無表記の例は、種類において、どの入声についても存しはするものの、その各々に属する語の異なり数はきはめて少く、したがつて、頻度数も極く少いといふことができる。さて、右に引いた無表記の諸例の中で、当該の入声音のすぐ次に濁音のあらはれるのは、「きちん」のみである。「二十中ご」は、語末にあらはれるのでまた別の意味で特殊であるが、今は、別種の問題をふくむものと考へてしばらく除外する)

「きちん」の「ち」が濁音でなければならぬといふことは院政期の成立である、前田本字類抄を座右にしてゐる者にとつては、いはれなき、固定觀念ではないかと思はれる節が

ある。梁塵秘抄に見える「きちん」が、正しく「麴塵」であるとするならば、なほ一層、時代の同一といふことから考へて、「ヂ」に依拠するのは有害な固定観念であらう。

そこで、他の側面から、「塵」の字音を調査しえたところ（これが、前に弁解したごとく不十分な調査の一つに属するものである。手許にあるもので当面の用を弁じたので、後日の補正を期する）を次にのべよう。

漢字音の清濁やアクセントを調査するに当って、元來字音の系統（もしくはは系列・体系）に、呉音・漢音その他多くがあつて、同一字の字音・アクセントが、さまざまになつてあらはれる。奥村三雄氏の「漢語のアクセント」（国語国文三〇ノ一—昭和三六・一）にも、字音の系列のちがひの弁別の困難に言及するところがあつて、以下私が採用した文献にも字音の系列が、二種ないし二種以上混濁することがあるから一概に論断し去ることのできない困難が伴ふのであるが、たゞ、少くとも、「字音といふ世界に、かつてかかる現象が事実として存在した」といふ報告の形式でならば、意味があり、また従来の観念をうごかすに足る、といふ、最小限の節度に於いて述べたいのである。この際、いふまでもあるまいが、日本における文献は、中国の字音そのまゝを嚴格にまもるものでなくとも、日本の過去の言語史上の事実を伝へるものならば、どんなものでも、資料の信憑性が確保できる限り視野のうちから疎外すべきでない。いな、むしろ日本の字音の調査にとつて、日本化したものの方が、ときがたい複雑さ

に閉されてゐても、他に優先して重要でさへある、といつてもよいであらう。

「塵」の字音が、漢音チン、呉音デンとされてゐること、あらためていふまでもない。しかし、日本語の現代の状況では、漢音チンがそのまゝの形で保存・流布してゐるのではない。「デン」といふ呉音系のもの、もしくは、それに一致してゐる「ヂン」といふ、濁音の方が、流布してゐる。一般に「塵」の単字を、「チン」と清んで読む習慣は、存しない。

倭漢朗詠集の古訓点本の、字音語のよみは漢音の性質に合ふものが多いとされてゐるが、今、斑山文庫旧蔵寛正本によると、

麴塵（上、春興）（上、柳）

は何れも「麴」にキクのふり仮名をして入声一点、「塵」に平声一点をさしてゐるから、キクチンとよまれる。同本では外に

紫塵（土、早春）

遺塵（上、三月三日）

とある「塵」も、やはり平声一点で、漢音として清音によまれたらしいことが明らかである。右の語例の外に「塵」の字が朗詠集に見えるが、いづれも訓読で、字音としての声点はさしてない。また同じく斑山文庫旧蔵本の教順本は、声点をささぬのであるが、清濁をくはしく示してゐるもので、これにも濁点を付して、積極的にデンとよませる例が一つも見えない。さらに、先に日本歌謡集成第三巻の重版本（昭和三五

年五月)の月報に小稿「和漢朗詠集の題目のよみ」で言及した、亀井孝氏蔵無刊記本の書入れの声点でも、右にあげた字音よみの「塵」は、いづれも、「チン」と清むべきことを示してゐる。朗詠集の近世の刊本では、私の手許にある寛永十七年秋西村又左衛門刊本「和漢朗詠集」、貞享三年九月近江屋三左衛門刊本「頭書和漢朗詠集」、零本「大寶倭漢朗詠集」、天明二年七月京都勝村・中川刊本「倭漢朗詠集」など若干のものを見ると、いづれも「デン」と濁るか、または濁点をつけてないのであるが、清音であることを積極的に証するものは一つもない。近世になっては、現代語におけるやうに、デンと濁る、いはゞ、呉音の方に、統一が成り立ったものと思はれる。それが、今日のデンの字音の常識の源流に属するかどうか、別個の問題として追究すべきであるが、少くとも、過去のある時代または連続するかなり永い時代にわたって、清音の形も存在したことは疑ひを容れない。呉音としての、デンは、

### 微塵

といふやうな、仏教に因縁のある用語の上に普通に用ゐられたもので、稀有のことではなく、むしろ、一般的といつてもよからうが、前田家本色葉字類抄では、濁音必ずしも一般的でない。用語によって、呉音・漢音の区別が行はれ、語の中でも、またその部分ごとに両者の区別が存在することすらあるのである。元來、漢音が字音として採用されて後の、両音の区別・範圍は、故実読みといふ観点からみて、語によつて

は口頭では呉音によむが、書証についてよむときは漢音といふ風に区別のあることもあったといはれ、また信ぜられる節があつて、前述のごとく一概の論はなしがたい。(故実読みについては、小論「『読み癖・故実読み』序説」へ解釈と鑑賞二五ノ一〇―昭三五・九V参照。また、岩橋小弥太氏「名目雑抄」へ金田一博士古稀記念言語民俗論叢Vに、すでに詳しく呉音漢音の用語の別の論がある)

そこで、字類抄に見える「塵」の字、および、「塵」をふくむ用語について、再度のべて見よう。(この点も、十分の手を尽してゐないから、遺漏の多いことを恐れてゐる、読者諒せよ)

チの部、地議門に

塵(チン)チリ(漢字「塵」に平声一点)

チの部、疊字門に

塵土 同(上をうけて、地部に相当する)チント(「塵」

に平声一点、「土」に平声一点)

とあるのが、先づもつとも早く注目の対象となるであろう。

この外には、先にあげた

麴塵

と、ヨの部疊字門の

余塵 流例部 ヨチム(「余」に平声一点)

リの部疊字門の

梁塵 塵名 リヤウチン(「梁」に平声一点、「塵」に平

声一点)

の、声点をもつものがある。なほ、

和光同塵 (ワ部疊字)

煙塵 ワサワヒ (同右、訓読の部)

などには、声点がない。字類抄としては、中巻・下巻に

玉塵 (ク、疊字)

繼塵 (ケ、疊字)

微塵 (ミ、疊字)

なども見えるが、これらは前田本に缺けてゐて黒川本のみ  
に存する部分であるからして声点がない。

さて、右によって見ると、前田本字類抄では、「塵」の字  
に関するかぎり、「微塵」を除くと「チン」と明らかに濁音  
である語が存しないといふ推測さへ可能になる状況である。

ここで、字類抄における「麴塵」のよみのキチンを、こと  
さらにキヂンと解するの非なるを証しえたと考へるのであ  
る。キチンを、そのまゝ「キチン」といふ音をあらはすもの  
と見るべきか、または、キの次にクの音節があるのを表記し  
ないのか、はたまた、キクが促音化して「キツ」となつてゐ  
たものか、その辺の事情は、前田本字類抄において、直ちに  
決しうる体の、簡単な問題ではなからうが、キチンが、梁塵  
秘抄において占める位置からすると、他の三内入声無表記の  
例と共に促音化したと解すべき多少の余地がひらけて来ると  
は考へうる。そこで、促音化したものを表はすと仮定して、  
前田本字類抄の内部事情に矛盾を生ずるや否やを極めて見な  
ければならない。

前田本字類抄の記事の中で、三内入声の音の韻尾の、仮名  
での書き方は、多くは、判然とツ・チ・ク・フ(またはウ)・

キを用ゐる例であるが、(中にウとしたものは、声点の位置  
が入声でなく、他の位置にさしてあるものがある)

一切 イセツ(イ、疊字)

樽風 ハフ (ハクフウとも。ハ、地儀)

薄詩 ハカ (ハ、植物。ハに平声二点、カに上声一点)

拔頭 ハトウ(拔は上声二点。頭は平声一点。ハ人倫)

白粉 ハフニ(ハ、雑物)

末仕 ハシ (ハ疊字。末に去声一点。仕に平声一点)

法華寺 ホクエシ(ホ、諸寺)

右にあげた若干の例は、入声音にあたる字音の「一」「樽」  
「薄」「拔」「白」「末」などの、韻尾を表記しないもので  
ある。これらが、すべて、韻尾の実在にもかかわらず、無表  
記であるものと断定することはできず、また、反面からい  
ふと、すべてが韻尾の脱落してゐる姿を写したものと断  
定しがたいものと考へられる。ハの疊字に「白駒 ハツク」  
があるが、テキストクリテイクの立場からはこの「ツ」が  
「ク」の誤であらうとも考へられるので、前田本字類抄とし  
ては、促音表記とは断定しがたい。ハフ・ハフニ・バトウな  
どについては、入声の韻尾の消えてゐるものと見て正しいか  
と考へられ、「麴塵」をキチンとするのも、それに齒ひせし  
めるべきであらうかと思ふ。

即ち、梁塵秘抄の中で、三内入声の韻尾の無表記のもの

うち、促音化してゐたために無表記といふものも存在するかと  
思ふけれども、脱落した形で行はれてゐたものも存在して  
ゐたとみとめることができよう。仮にそれが、推測の域を  
多く出ないものとして一步をゆづつても、「キチン」の「チ」  
が濁音であつたこと（従つて、語中にある三内入声音  
の無表記の例の中に、濁音につゞく場合の唯一例をみとめな  
ければならないこと）を、支持するわけには行かないこと、  
右に述べて来たところで明らかであらう。（もし濁音につゞ  
く入声音があるとすれば、それは、その入声音韻尾は、仮名  
の、フ(ウ)・ツ・チ・ク・キなどで明記されるものであつて  
しかもはつきり、その仮名のあらわす音の姿であつたもので  
あるか、しからざれば入声韻尾がすでに促音化してゐて、平  
曲などでいふノム声になつたものであつたか。その中の何れ  
かであるのが順当と考へられるのである。）今、三巻本字類  
抄の声点に示す「キチン」の形の、音の実相が終局的に明白  
にならないのを遺憾とするが、この記事を「キヂン」と判断  
することは粗放にすぎると思ふ。

三巻本色葉字類抄の声点について、近時やうやく、資料と  
しての価値をみとめた好論が相次いで出現する風潮が見える  
けれども、清濁については、まだ十分の調査が行届かないた  
めか、信頼度がどの程度のものか、躊躇される向もあらう。  
しかし、それにしても、もとの記事を意改してまで、既成の  
清濁の觀念に同調せしめる事は有害であらう。

ちなみに、前に示したやうに、「梁塵」の場合も、「リヤ

ウチン」とチンを清んでよむべきことが、三巻本字類抄前田  
家本では記されてゐる。熱田本平家物語の声点の示すところ  
でも、ほど同巧のものあり、（その声点は上声一点である。  
同書巻五、一九才の「蠶塵」の場合も「塵」は上声一点）本  
誌十八号で述べたところであるが、これによつて考へると、  
「梁塵秘抄」といふ書名の場合にも、リヤウチンヒセウとい  
ふよみ方が推定されないことでもなくなるのである。無論こ  
れについては、強く主張するわけではなく、少くとも単字と  
しての「塵」を漢音系のチンの清音よみする事実が一つの規  
範としてあつたといふことを報告するのみであつて、上の字  
の「梁」はリヤウで、元來喉内撥音に属するものであるか  
ら、その故に、連濁で、ヂンとなりうる可能性が十分にあつ  
たであらうことを、いひ添へれば十分である。

## 二、「調度」の字音

「調」と題する亀井孝氏の短篇が、「日本歴史」一五二号  
—昭和三六・二（吉川弘文館刊）誌上に見える。やゝ随筆風  
の覺書といった論調であるけれども、「調所」をズシヨとよ  
むことに端を發して、ズシヨが、やゝ古くは、ヅシヨ、そし  
て図式的に復原されるべき原形としてはデウシヨであるべき  
ことをいふために、「調」の呉音系のものがデウであつたらう  
ことから、林羅山の徒然草の注「野槌」における「調度」お  
よび安原貞室の「片言」の記事中の「調度」にその証を得、  
さらに「不調」の語に見える「調」をデウとする証を、荒木

田盛徹の類字仮名遣に求められた。亀井氏は、「調」の訓、ミツキについても、更に筆を進めて居られるが、今は、私のこの稿の主題にのみ問題を限って、「調」の字音について知る所の次に記さうと思ふ。

亀井氏のいはれるところ、尤も首肯すべきところが多い。

三卷本字類抄でも、

「テ」の部の雑物に

調度 テウト／云胡籙／又——文書

(「調」に平声二点、「度」に平声二点)

とあって、デウの形を、「調」の字音をあらはす仮名書きとして求めることができる。しかし、この字類抄で、他に、「調」を単独で、もしくは、疊字など文字連結の部分として示す場合は、積極的にデウを推しうる形が見えない。

調子、調良 調物 調庸 調魚 調備

などの、疊字で、声点あるものでは、単字の「調」にあるやうに(シの部辞字にシタ、ムの訓の下に在る)、平声一点を示すのが普通である。「調子」の場合は上声一点であり、「調物」「調庸」の場合は去声一点である。なほ、テの部の疊字には調度 同(上をうけると解すれば、資用部家計分か)

テウト

(「調」に平声一点、「度」に平声一点)

とあって、先に示した雑物門の「調度」とは清濁が異なる。

また、声点なしの記載としての

調鹽 ト、ノヘアフ(ト、飲食)

調和 シホアフ(シ、飲食)

調味 テウヒ(テ、疊字)

調樂(テ、疊字)

に加えて、

調 アフ(ア、辞字)

調 ツキ(ツ、姓氏)

などがある。

黒川本でしか見られない部分(中巻)には、

不調 フテウ

などが見出されるが、いづれも声点がないので、参考に供しがたい。

右のやうに三卷本色葉字類抄では、「調」の字音としての「デウ」は、たゞ一語、「胡籙」をさす時の「調度」に限って、見られるものであることが判明する。

文献の内部徴証を批判する場合、批判者の側から見て、絶対多数例と、孤例とが、明白に対立して、矛盾を示すと見ることがあったとすると、一般には、絶対多数の例が、正しく、真実であり、孤例は真実でない(即ち、失錯によって生じたもの)または似而非なる事実とされるであらう。たゞしこのやうな判断が成立つためには、対立する現象が、互に同時に成立することの絶対不可能な矛盾であることが証明されておかなければならない。多くの場合、言語史的に或事実Pと他の事実Qとが同時に成立し得ないといふ条項の証明はかなり困難である。にもかゝらず、今の場合「テウ」が大多

數で「デウ」が孤例であるといふ事象の中に、デウは真実でないといふ風な批評が生まれる間隙がある。それは今、三巻本字類抄の場合にしてみると前田家本ですらも伝写についての全幅の信頼がないからであり、編集の錯誤もあり得ぬことではないといふ、簡単な推測にもとづいてである。そしてそれは、全く故なきことではないのであるから、問題は、常に個別的な検討を待つてゐるといふべきであらう。

今昔物語集卷第廿五の第四（平維茂郎等被殺語）に

大郎介物食ヒ畢テ高枕シテ寝ヌ。枕上ニ打出ノ太刀置タリ  
傍ニ弓胡録鎧甲有り。庭ニ郎等共調度ヲ負テ、所所ニ立廻  
ツ、主ヲ守ル……。〔印刷の都合で、すべて大字に転写〕

また、同じ巻に、第五（平維茂尉藤原諸任語）

余五驚テ郎等共ヲ呼テ、「軍ノ來タルニコソ有メレ。鳥ノ  
痛ク騒グハ。男共起テ調度負ヘ。馬共ニ鞍置ケ。櫓ニ人登  
レ」ナド俸テ……

また、同じその語のしばらく後の文に

凡ソ家ノ内に調度負タル者、上下ヲ不論ズ、廿人に不過  
ギ。極シク緩タル程ヲ知テ……

などあるが、これらの文に見える「調度」に対して、三巻本  
字類抄の、テの雜物門の記載は、正しく適當する。そして、  
これらは、同抄のテの疊字門に見える「調度」の注と、必ず  
しも背反するとはいひがたいが、雜物門の方がよく合致す  
る。そして、それを採用するなら、よみの清濁はテウドでは  
なくデウドの方を採用せざるを得ない。無論、前述のやうに

三巻本字類抄の声点全体の信頼度に関するものであるから、  
孤立したこの「デウド」は他の傍証を得ないと軽々しく信じ  
ることはできないところである。さて今昔物語集卷二十六の  
第十七（利仁將軍從京敦賀將行五位語）に

利仁カ共ニモ調度□一人、舍人男一人リ有ケル

とあり、宇治拾遺物語によつて補つて見ると、「調度ガケ」  
即ち、「調度懸」と読まれるが、その「調度ガケ」は、日ボ  
辭書によると、デウドガケの語形で行はれたものと推定され  
る。したがつて、便宜、この日ボ辭書のローマ字書きを傍証  
に得て、三巻本字類抄の「調度」の一つのよみ「デウド」が  
伝写の誤りでもなく、編者の錯誤でもなからうといふことが  
ほゞ歸結しうることになる。現代通行の辭書類では、この種  
の事實が明白になつてゐないことを不滿としたが、今、龜井  
氏の論に接して、大いに意を強くしたのである。たゞ龜井氏  
が、私の挙げる三巻本字類抄や日ボ辭書の記載を、ことさら  
に（？）引用することを避けて居られるのは、有意的な配慮  
か、しからざるものか、考へさせられる処があつた。即ち、  
色葉字類抄三巻本の字音の声点は、未だ十分の本文批判を経  
てゐない、いはゞ生のまゝのあらたまでである。すべて瓦石に  
終つて了ふ牀の佃少きものとも思へないが、玉として拾ふべ  
きや否やに迷惑するものが少からず混つてゐる。その点で、  
龜井氏の躊躇が生じたものかとも思ふ。私としては、今昔物  
語集の校注の事業が未だ半ばなので、この「調」の字音デウ  
についての考へ方を、「麴塵」の場合を処理すると同じく、



右のやうに、三巻本字類抄内で、何らかの帰結を見出さうとして十分に及ばず、中間報告の域を出ないが、すでにかく処理したといふ経験を、亀井氏に語るべきものと考へたにすぎない。しかも一転して三巻本字類抄声点に対する信頼度を漠然と高める手がかりになし得る事情が明らかになつたことを喜ぶ余り、筆をとつて、文字につゞる誘惑に屈したのであるが、三巻本字類抄の字音の性格は、今後、他の辞書体の資料群との参照のみではなく、具体的な言語作品との参照といふ作業を経て、十分にその意義が顕彰さるべきものと考へるのである。(三月十日稿)